

## 硬式野球部

部員数 : 3年生・3名、2年生・5名、1年生・6名、  
マネージャー・1名 計14名

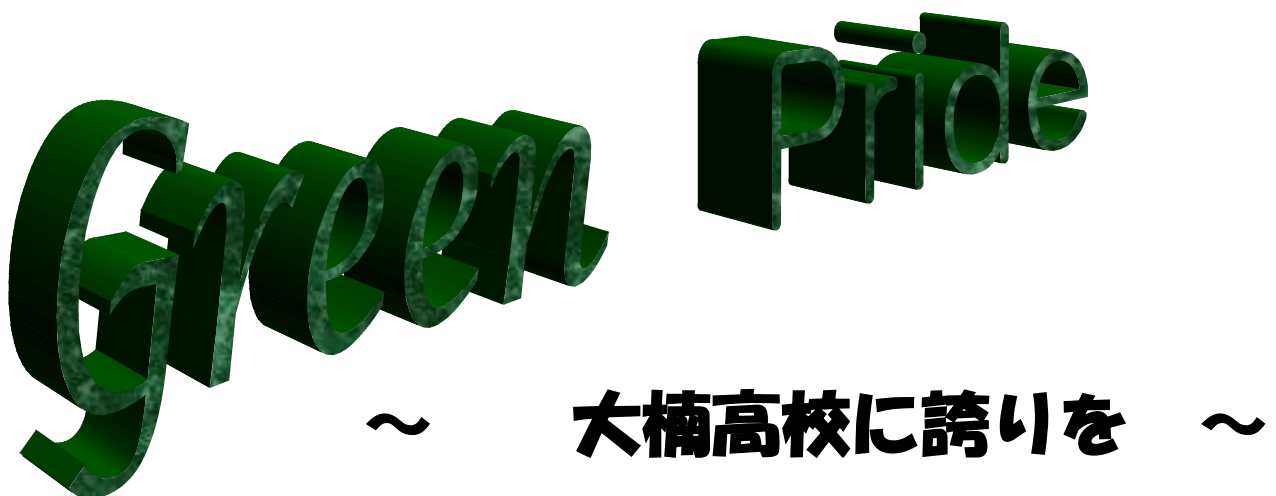
技術指導者 : 6名  
( 山崎 滋彦、馬賀 大祐、石井 洋、倉田 陵、大川 靖光、鎌原 彩)

トレーナー : 1名  
( 鍼灸師・本間 麻衣 )

活動日 : 火曜日～金曜日 グランド練習  
土曜日、日曜日 練習試合／グランド練習  
月曜日 休み

テーマ : 『 Green Pride ～ 大楠高校に誇りをもつ ～ 』

- 目指すチーム :
- ① 一生懸命に野球を楽しもうとするチーム。
  - ② うまくなることをあきらめないチーム。
  - ③ どんなミスをしても次の状況を考え、行動できるチーム。
  - ④ チームで勝つという目標に取り組めるチーム。
  - ⑤ 周囲の人から応援されるチーム。



## 春の地区予選 ～ 7名の決断 ～

年が明けてから、7名での練習をひたむきに頑張ってきた彼らは、1つの決断を迫られていた。それは、3月27日からはじまる地区予選に出場するかどうかだ。当然、7名だけの出場はできない。出場するとすれば、野球部でない生徒を2人、助っ人として探さなければならない。そして、試合がどんな展開になったとしても、戦い抜くという覚悟をもてるかどうかだ。指導者達は、出場の有無は、選手達の決断に任せることにしていた。公式戦をこの春に経験することは、夏の大会に向けて新たな課題を見つける大きなチャンスであった。最上級生にとっても高校野球の大会はあと2つしかない大きな試合だ。当然、誰もが出場したいはずだった。ただ、軽い気持ちで、助っ人をお願いして、出場さえできれば何でもいいとは考えてほしくなかった。日々の練習を一緒に乗り越えること。お互いに想いをぶつけ、目標を1つに共有すること。その積み重ねを自分達の意志でやるのが、指導者達が1番伝えたいことであり、そんなチームで夏の大会を戦うことを目標にしてきたからだ。どちらの選択でも自分達の意志と覚悟をもって決断してもらいたかった。だから、出場するためには、いくつかの条件を出した。やるからには最後までやり通す覚悟を持つこと。助っ人を自分たちで探すこと。助っ人はあくまで助っ人であって引き受けてくれた友達が後悔するような雰囲気をつくらないこと。最後にあくまで夏の勝利のための大会だと思うこと。すると、彼らは簡単に決断をせず2ヶ月間悩みながら練習する日々を送っていた。

そして、3月になり、キャプテンがチームの決断を指導者達のもとへ伝えにきた。答えは、3年生で力を貸してくれる生徒2名にお願いし、出場するという事だった。大会に出場してくれる3年生の2人はまじめで温厚な人柄だった。再度、出場するための条件を確認し、大会出場を決めた。大会が近くなるにつれて、毎日学校へ早く登校して、自主的に朝練する姿も多くみられた。助っ人の3年生も出るからには脚をひっぱりたくないという練習に参加してくれるようになった。助っ人の内、1人はサッカー一部の生徒であったが、日頃がんばっている部活だから、何とかしてあげたいという思いでサッカーの練習のない時は必ず練習に参加し、練習試合にも出場してくれていた。彼らは自分達で決断したことによってチームはまた少しまとまりをみせていったのだ。



3月27日、横須賀スタジアムで地区予選の初戦が行われた。相手は、逗子開成高等学校だった。3回までは2点リードされていたが、しっかりと集中力を保っていた。しかし、4回から思うように選手達の体が動かない。投手もストライクがなかなか入らずリズムが崩れ、そのまま、5回で試合が終わった。何もできないまま終わってしまった。3月28日に2戦目、相手は横須賀工業高等学校だった。少し公式戦の雰囲気にもなれ、リズムもでてきた。しかし、3回までに4失点、7回までにさらに3失点で試合

終了。選手たちは、やりきれない表情をみせていた。こんなはずじゃなかった・・・そんな表情だった。確かにいつもの力を存分に発揮していれば結果はもう少し違っていただかもしれない。ただ、今回は自分達の乗り越えきれない大きな課題が立ち塞がった。選手達は、直前の練習試合からどうしても自分のミスを許せずにそのことを引きずったまま試合を続けてしまっていた。悔しい気持ちを物にぶつけ、全力で走ることをやめ、だらけた様子でゆっくり移動し、苛立った顔をそのまましながらプレーし、チームで戦うことを忘れる瞬間が多々あった。ただ、多くの決断をしてきた彼らは以前よりもチームに対する意識が明らかに変わってきている。練習への取り組む姿勢も考え方も成長してきている。それは、助っ人に対する声掛けや接し方からもわかった。試合前から助っ人の選手達が緊張している様子だったので、声をかけたり、和ませてみたり、試合でエラーをしても気にしないように気遣っていた。守備でアウトを取るたびに盛り上げ、いいバッティングをすればベンチ全員で声掛けをしていた。最後の選手達のミーティングでもキャプテンから試合ができたのは2人のおかげだと感謝の言葉が真っ先に出ていた。周りに対する気遣いもしっかりとできるようになってきているのだ。大会の条件として出した「やり通す覚悟」がしっかり心に入っていたのだ。だからこそ、指導者達も悔しい気持ちでいっぱいだった。ただ、この春の大会に出場できたことによって、夏までに克服する最後の大きな課題がはっきりとわかった。いろんなことを予測していくこと、劣勢に立たされた時こそチームとして戦うということだ。この課題に挑戦する覚悟を持ってくれると信頼し、これから入学してくる選手達を期待しながら、大楠高校野球部の新たな挑戦がまた始まろうとしていた。

